

富山大学術研究部医学系の田中朋美講師らの研究グループは、出産前後の母親の心理的苦痛が子どもの発達に与える影響を調査し、妊娠期よりも産後の苦痛が深刻な影響を及ぼすことを明らかにした。子どもの健全な発達のためには、母親のメンタルヘルスを継続的に支援する体制の構築が不可欠としている。

環境省の子どもの健康と環境に関する全国調査（エコチル調査）に参加した全国約8万2千組の母子を対象に調査。妊娠中後期と産後1年の母親の心理的苦痛を評価し、子どもの1歳半から3歳までの発達状況との関連を分析した。

産後母の心理的苦痛 子の発達に深刻リスク

この結果、産後1年だけに心理的苦痛があった場合、子どもの発達遅延のリスクは1.25倍に上昇。妊娠中と産後1年の両方で苦痛があった場合は1.38倍で、妊娠中のみの場合は1.08倍だった。

研究グループは「公衆衛生、母
富山大など調査

継続的ケア必要

子保健、子育て支援政策の設計において、科学的根拠に基づく意思決定を支える重要な情報となる」としている。

研究成果は10月31日付の米医学誌に掲載された。